



序

福岡県の中西部、佐賀県との県境に位置する小郡市では、これまで市域北部のニュータウン開発や中・東部の工業団地造成、交通網の整備などに先立って埋蔵文化財の発掘調査が行われてきました。これによって、さまざまな時代の生活痕跡が発見され、ふるさと小郡の歴史的な様相を解明するための資料が蓄積されてきています。

現在、小郡市教育委員会の教育施策は「ほんものの教育力おこおり」をキーワードにしています。埋蔵文化財をはじめとする、郷土の伝統と文化が育んだ「ほんものの歴史資料」に触ることは、次世代を担う子どもたちの学びにとって重要な役割を果たすと考えています。また、小郡に暮らすあらゆる世代の人びとにとっても、日々の生活を豊かにし、地域への愛着を生み出すことにつながるでしょう。

今回ここに報告いたしますのは、平成29・30年度の国庫補助事業として発掘調査を実施した埋蔵文化財です。いずれも小規模な発掘調査ながら、郷土の財産となる貴重な資料をえられました。本書が、地域の歴史と文化を広め、伝えるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において関係者のみなさまには、多大なご協力をいたしました。記して御礼申し上げます。

令和2年3月31日

小郡市教育委員会

教育長 秋永 晃生

例 言

1. 本書は平成29・30年度国庫補助事業として小郡市教育委員会が実施した、個人住宅建設に先立つ発掘調査の報告書である。
2. 本書に掲載する遺構の実測は調査担当者が行い、製図は宮崎美穂子が行った。遺物の実測は調査担当者が、製図は久住愛子が行った。
3. 本書に掲載する遺構の写真撮影は調査担当者が行い、遺物写真撮影は有限会社システム・レコに委託した。
4. 出土遺物の洗浄・復元には佐々木智子・水富加奈子・山川清日・牛原真弓の協力を得た。
5. 本調査に関わる出土遺物・写真・カラースライド等は小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管している。広く活用されることを希望する。
6. 本書の執筆は西江（小郡大原町遺跡2・横隈上ノ原上遺跡4）・上田（小郡上町遺跡）が、編集は上田が行った。

凡 例

1. 本書で用いた北は座標北を基準とし、図上の座標は国土座標第II系（世界測地系）に換っている。
2. 本書で用いた標高は東京湾平均海面面（T.P.）を基準としている。
3. 本書で用いている略号は以下のとおりである。
堅穴住居：SC 土坑：SK 溝状遺構（溝）：SD ピット：SP 不明遺構：SX
4. 掲図中に示している数字は本文中の各遺物番号と一致する。



本文目次

序 凡例

第1章 調査の経過と組織	1
第2章 位置と環境	2
第3章 調査の成果	6
1. 小郡大原町遺跡2	6
2. 横隈上ノ原上遺跡4	9
3. 小郡上町遺跡	17
遺物観察表	25

抄録 奥付

挿図目次

第1図 調査位置図 (S=1/5000)	1
第2図 周辺道路分布図 (S=1/50000)	3
【小郡大原町遺跡2】	
第3図 小郡大原町遺跡2 道構配置図 (S=1/50)	5
第4図 溝状遺構 土層断面図 (S=1/40)	7
第5図 小郡大原町遺跡1・2の遺構対応関係 (S=1/200)	8
【横隈上ノ原上遺跡4】	
第6図 横隈上ノ原上遺跡4 道構配置図 (S=1/80)	9
第7図 1～6号溝 土層断面図 (S=1/40)	11
第8図 7・8号溝 土層断面図 (S=1/40)	12
第9図 1・2号土坑 平・断面図 (S=1/40)	13
第10図 出土遺物 実測図 (S=1/4)	14
第11図 調査地周辺の遺跡 (S=1/5000)	15
【小郡上町遺跡】	
第12図 小郡上町遺跡 道構配置図 (S=1/80)	16
第13図 穴穴住居 平・断面図 (S=1/40)	18
第14図 土坑 平・断面図 (S=1/40)	19
第15図 南区壁面・1号溝状遺構 土層断面図 (S=1/40)	21
第16図 出土遺物 実測図 (S=1/4)	22
第17図 平田家住宅・平田氏庭園との関係図	24

写真図版目次

【小郡大原町遺跡2】

- 図版1 ①調査区 全景 (南から)
- ②1～3号溝状遺構 実掘状況 (南から)
- 図版2 ③5～8号溝状遺構 全景 (北から)
- ④5～8号溝状遺構 全景 (南から)
- ⑤4号溝状遺構 実掘状況 (北から)
- ⑥2号溝状遺構 実掘状況 (北から)
- ⑦6号溝状遺構 土層断面 (北から)

【横隈上ノ原上遺跡4】

- 図版3 ①調査区 全景 (南東から)
- ②1号溝ベルト 土層断面 (東から)
- ③1号溝西壁 土層断面 (東から)
- ④1号溝 実掘状況 (東から)

- 図版4 ①2号溝ベルト 土層断面 (北から)
- ②2号溝南壁 土層断面 (北から)
- ③3号溝ベルト 土層断面 (北から)
- ④3号溝南壁 土層断面 (北から)
- ⑤2号溝 実掘状況 (北から)
- ⑥3号溝 実掘状況 (北から)

- 図版5 ①4号溝ベルト 土層断面 (北から)
- ②4号溝南壁 土層断面 (北から)
- ③5号溝北壁 土層断面 (南から)
- ④6号溝ベルト 土層断面 (東から)
- ⑤4号溝 実掘状況 (北から)
- ⑥5号溝 実掘状況 (南東から)

- 図版6 ①6号溝西壁 土層断面 (東から)

②7号溝西壁 土層断面 (東から)

- ③7号溝ベルト 土層断面 (東から)
- ④8号溝ベルト 土層断面 (東から)

⑤2・3・4・6・7・8号溝 実掘状況 (東から)

図版7 ①8号溝 実掘状況 (東から)

- ②1号土坑 土層断面 (東から)

③1号土坑 実掘状況 (東から)

- ④2号土坑 貼床及び遺物出土状況 (南から)

⑤2号土坑 遺物出土状況 (南から)

⑥2号土坑 土層断面 (南から)

⑦2号土坑 実掘状況 (南から)

図版8 出土遺物

【小郡上町遺跡】

図版9 ①北区 全景 (西から)

②南区 全景 (東から)

図版10 ①1号住居 全景 (東から)

②1号住居 実掘状況 (東から)

③1号土坑 実掘状況 (南東から)

④2号土坑 実掘状況 (南東から)

⑤4号土坑 実掘状況 (南西から)

⑥大型設置跡 (東から)

⑦3号住居 全景 (南東から)

⑧1号溝状遺構 土層断面 (北東から)

図版11 出土遺物



第1章 調査の経過と組織

本書で報告する発掘調査は、各事業に先立つ事前協議の結果、平成29・30年度の国庫補助事業の一環として実施し、調査報告書を令和元年度の国庫補助事業として作成することとなった。それぞれの調査に至る経緯については下記のとおりである。

(1) 小郡大原町遺跡 2

【経緯】 本遺跡の調査は、個人住宅建設に先立って「埋蔵文化財の有無に関する照会」(事前審査番号17097)が提出されたことに始まる。小都市教育委員会が平成29年10月25日に試掘調査を行ったところ、現況面より50cm下で遺構を確認した。これを受け協議を行った結果、敷地のうち建物部分の61.27m²について国庫補助事業として調査を行うことで同意を得た。

【経過】 平成29年12月7日重機による表土剥ぎ開始 8日人力による遺構検出及び掘削開始 12日全景写真撮影 19日埋め戻し開始、20日埋め戻し完了、引き渡し

(2) 横隈上ノ原上遺跡 4

【経緯】 本遺跡の調査は、個人住宅建設に先立って「埋蔵文化財の有無に関する照会」(事前審査番号17144)が提出されたことに始まる。小都市教育委員会が平成30年2月2日に試掘調査を行ったところ、現況面より60cm下で遺構を確認した。これを受け協議を行った結果、敷地のうち建物部分の99m²について国庫補助事業として調査を行うことで同意を得た。

【経過】 平成30年2月9日重機による表土剥ぎ開始 14日人力による遺構検出及び掘削開始 3月2日全景写真撮影 7日埋め戻し開始、完了後引き渡し

(3) 小郡上町遺跡

【経緯】 本遺跡の調査は、個人住宅建設に先立って「埋蔵文化財の有無に関する照会」(事前審査番号17158)が提出されたことに始まる。小都市教育委員会が平成30年3月6日に試掘調査を行ったところ、現況面より20cm下で遺構を確認したため、発掘調査による記録保存が必要な旨の回答を行った。その後協議により、建物部分の100m²について国庫補助事業として調査を行うことで同意を得た。

【経過】 平成30年6月15日重機による表土剥ぎ開始 18日人力による遺構検出及び掘削開始 22日全景写真撮影 26日埋め戻し開始、完了後引き渡し

なお各調査とも、現地調査終了後は図面・遺物整理作業及び報告書作成を実施している。

【小郡大原町遺跡 2】



【横隈上ノ原上遺跡 4】



【小郡上町遺跡】



第1図 調査位置図 (S=1/5000)

*図面内の数字は調査次数



(4) 調査の組織

【平成 29 年度】

小郡市教育委員会 教育長 清武 輝
部長 山下博文
文化財課長 柏原孝俊
係長 杉本岳史 (小郡大原町遺跡 2 現地調査)
主任主事 西江幸子 (横隈上ノ原上遺跡 4 現地調査)

【平成 30 年度】

小郡市教育委員会 教育長 清武 輝
部長 黒岩重彦
文化財課長 柏原孝俊
係長 杉本岳史
主任主事 上田 恵 (小郡上町遺跡現地調査)

【平成 31・令和元年度】

小郡市教育委員会 教育長 清武 輝 (~9月末)
秋永晃生 (10月1日~)
部長 黒岩重彦
文化財課長 柏原孝俊
係長 杉本岳史
主任主事 上田 恵 (小郡上町遺跡報告書作成)
西江幸子 (小郡大原町遺跡 2 ・ 横隈上ノ原上遺跡 4 報告書作成)

第2章 位置と環境

(1) 地理的環境

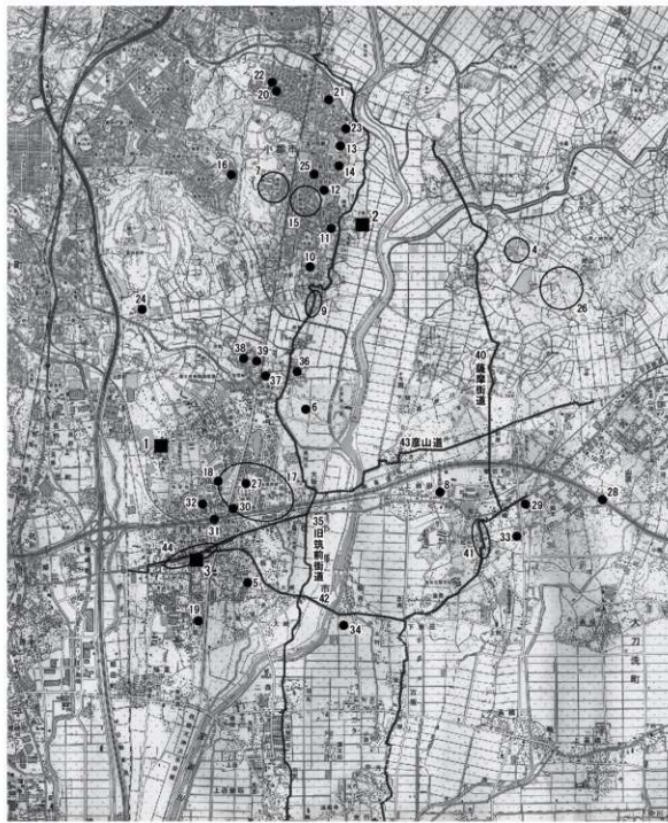
小郡市は福岡県と佐賀県の県境、県内では中西部に位置する。市域は東西約 6km、南北約 12km の範囲である。市域の北端は、東側から宝満山、西側から脊振山系が張り出し、福岡平野と筑紫平野を分断するかのような地峡帯が形成されている。中央部には、宝満山の山麓を水源とする宝満川が南北に貫流し、やがて筑後川へ合流する。

宝満川右岸には、脊振山系から派生した通称「三国丘陵」と呼ばれる標高 30 ~ 40 m の丘陵が、北東部に花立山 (標高 130.8 m) が存在し、これらから南は緩やかに下る低台地へ移行していく。市域では前述の三国丘陵や低台地を中心、数多くの生活痕跡が発見されている。今回報告する小郡大原町遺跡 2 ・ 横隈上ノ原上遺跡 4 ・ 小郡上町遺跡は、いずれも台地から低地へ移行する縁辺部において発見されている。

(2) 歴史的環境

本書で報告する遺跡では、古墳時代後期 (小郡上町遺跡) と中世・近世 (小郡上町遺跡・横隈上ノ原上遺跡 4) を中心とした遺構・遺物を検出している。以下、小郡市に分布する主要な遺跡を中心に歴史的環境の概要を記す。

旧石器時代は、花立山山麓や三国丘陵周辺で資料が採集されているのみであり、未だ不明な点が多い。縄文時代に関しては、干潟向畠ヶ浦遺跡 (4) でまとまった土器・石器の出土が見られる。また遺構としては、大崎井平田遺跡 (5) の集石炉・大保横枕遺跡 2 (6) の石組炉のはか、三沢北



1:小郡大原町 2:横隈上ノ原上 4:3:小郡上町 4:千畳 (千畳向咲ヶ浦・千畳城山) 5:大崎井牟田 6:大保横枕 7:三沢北中尾

8:上若田 9:力武内塙 10:三国小学校 11:横隈上内塙 12:横隈郭家 13:横隈北田 14:横隈鍬倉 15:横隈山 16:ノロ

17:小郡・大坂井 18:小郡若山 19:寺福童 20:津古2号墳 21:津古1号墳 22:津古1号墳 23:三国の森1号墳 24:花菱1・2号墳

25:横隈山古墳 26:花笠山古墳群 27:小郡官衙 28:宮道 29:松崎六本松1・2 30:向塙地 31:小郡前伏 32:小郡大保道

33:松崎六本松3 34:福吉元次 35:旧筑前街道 36:大保横枕 37:大保西小路 38:三沢寺小路 39:三沢椎道 40:藤原街道

41:松崎宿 42・43:藤原道 44:小郡町

第2図 周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)

中尾遺跡（7）・上岩田遺跡（8）で落とし穴状構造が確認されており、人々の活動の様子がうかがえる。弥生時代になると、前期初頭から三国丘陵を中心にして集落形成していく。力武内畠遺跡（9）では、松菊里型住居を伴う集落と初期水田、これに付随する井堰が確認されている。以後、中期初頭までの間に、小丘陵単位で集落やそれに伴う墓域が形成されている。三沢北中尾遺跡（7）や横隈山遺跡（15）は大規模な環濠を伴う集落であり、横隈上内畠遺跡（11）では土壙墓群、横隈狐塚遺跡（12）では壺棺墓群が検出されている。横隈北田遺跡（13）、横隈鍋倉遺跡（14）では朝鮮半島との人的交流を示唆する資料が出土している。一ノ口遺跡（16）は、独立丘陵を造成し周辺に開拓施設を備えた集落で、当時の食生活がうかがえる資料が多数見つかっている。中期には市中央部で小郡・大坂井遺跡群（17）という大集落が形成される。南北700m、東西1kmの巨大集落は、周辺の小規模な集落とつながりを持つことで徐々にムラからクニへ発展していく様子がうかがえる。関連遺跡である小郡若山遺跡（18）からは重要文化財である多錫細文鏡が、南に1kmほど離れた寺福童遺跡（19）では銅戈が出土しており、当時の祭祀形態を推察する資料となっている。後期の集落の調査例は少なく、三国丘陵や花立山南西麓で確認されている。

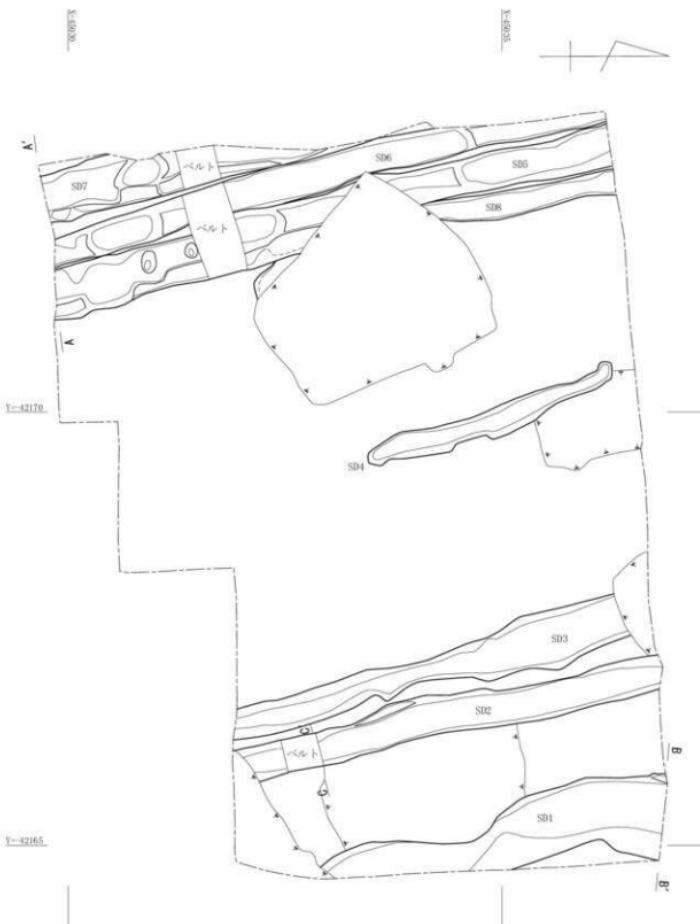
古墳時代になると、三国丘陵の北部で首長墓系列の古墳群が築造される。津古2号墳（20）、津古生掛古墳（21）、津古1号墳（22）、三国の鼻古墳（23）と4世代に渡る首長がこの地域に君臨していたと想定される。中期の古墳としては、渡来人との関連がうかがえる花葬1・2号墳（24）や埴輪による装飾を伴う横隈山古墳（25）などが見られる。後期になると、三国丘陵（三沢古墳群）と花立山（花立山古墳群）で群集墳と称される密集した古墳・横穴墓群が構築される。またこの時期にも花立山穴観音古墳（26）のような前方後円墳を築造する文化が残る。

6～7世紀、朝鮮半島の不穏な政情を受け、対外交流の窓口であった北部九州の防備が重視された。博多湾と有明海の中間にあり、宝満川の水運も利用できる小郡市近辺はとりわけ重要視されたと考えられる。上岩田遺跡（8）では、この時期の初期評衡と想定される大型掘立柱建物群と瓦葺建物の基壇を検出している。筑後国御原郡衙にあたるこれらの施設は、8世紀前半に小郡官衙遺跡（27）へ、同世紀後半には大刀洗町下高橋官衙遺跡へ移転しており、同時期に整備の進んだ筑後国府との関連がうかがえる。また官衙と関連して、筑紫平野東西官道をはじめとする官道が整備されたことが、宮廻遺跡（28）や松崎六本松遺跡（29・33）、向築地遺跡（30）、小郡前伏遺跡（31）、小郡大保道遺跡（32）などの調査成果から明らかとなっている。

中世の遺跡は、市南部と中部で多く確認されている。稻吉元矢次遺跡（34）は大規模な溝3条を伴う古代末から中世のかけての集落で、輸入陶磁器の出土量や鍛冶・製鉄関連遺物の存在などから宝満川の水運を利用した港町の可能性が示されている。中部の集落の展開は、1359年に起こった南北朝期の九州最大の合戦、大保原合戦の影響を強く受けていると推測される。元々は式内社である御勢大靈石神社の周辺で、大保龍頭遺跡（36）や大保横枕遺跡のような中世集落が形成されていた。しかし戦乱のちは、大保西小路遺跡（37）や三沢権道遺跡（39）など西部に新しい集落が成立している。

江戸時代の小郡は、久留米藩の穀倉地帯として、また東西南北に街道が走る交通の要衝として発展する。寛文8年（1668）、有馬豊範が久留米藩より1万石の分知を受けて松崎藩が成立したのに伴い、新たな参勤交代道として薩摩街道（40）と松崎宿（41）が整備された。また、肥前国から松崎宿を経由して筑前国へ抜ける彦山道（42・43）沿いで、小郡町（44）が流通と交通網の拠点として繁栄した。近世遺跡の調査例はまだ少数であるが、薩摩街道以前の主要道である旧筑前街道沿いの横隈上内畠遺跡（11）や小坂井屋敷遺跡、小郡町から1kmほど南下した福童町遺跡などで、まとまった遺構・遺物が確認されている。

このように小都市内では、各所で連絡と人びとの生活が営まれており、そのさまざまな痕跡の調査が行われてきた。



第3図 小郡大原町遺跡2 遺構配置図 (S=1/50)



第3章 調査の成果

1. 小郡大原町遺跡 2

【調査の概要】

小郡大原町遺跡 2 は、秋光川右岸の沖積台地の縁辺部に位置する。標高は 21.7 m 前後で、遺跡の北東から北西に向けて谷地形が入り込む。遺跡の周囲は溜め池の埋立地または現在も溜め池で、南側へはなだらかな丘陵が延びる。

今回の調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である小郡大原町遺跡の北東隅にあたる。これまで本調査地点の南側隣接地で調査が実施されており、近代の水路を含む溝状遺構が検出されている。遺構検出面の標高は 21.7 m 前後で現地表から 44cm 下る。検出した遺構は、溝状遺構 8 条である。

【遺構と遺物】

1) 溝状遺構

1号溝状遺構（第3・4図、図版1）

調査区東端に位置し、一部西側を擾乱により削られているが、やや西に振った南北方向に流れる。上端の幅は 72 ~ 92cm、下端幅は 16 ~ 57cm、深さは最大で 29cm を測り、南北に延長する。断面形状は逆台形状、土層の堆積状況は水平堆積を示しており、水成堆積を示す部分は確認されていない。埋土の色や土質が黄灰色土をベースにしており、5号溝状遺構・6号溝状遺構・7号溝状遺構とは異なることから、これらの溝の埋没時期と時期差があることが想定される。出土遺物はなかった。

2号溝状遺構（第3図、図版1）

調査区東寄りに位置し、やや西に振った南北方向に流れる。上端の幅は 40 ~ 46cm、下端幅は 22 ~ 30cm、深さは最大で 40cm を測り、南北に延長する。断面形状は、逆台形状をなすが、一部西側の中央部よりテラス部をもつ個所がある。土層の堆積状況は基本的に水平堆積を示しているが、1 層が粘質性の高い土層、3 層が砂層である一方、4 層は地山土を含む粘質性の高い黒灰色土、5 層が 4 層に近い砂質性であることから、1 ~ 3 層は洪水による堆積、4・5 層は自然堆積が想定される。なお、最下層の 6 層は地山ブロックを含む粘質性の高い土壤であることから、溝が機能していた時点の濁りの層と想定される。埋土から出土した遺物は土器片 1 点のみであるが、小片のため器種・器形ともに不明である。

3号溝状遺構（第3図、図版1）

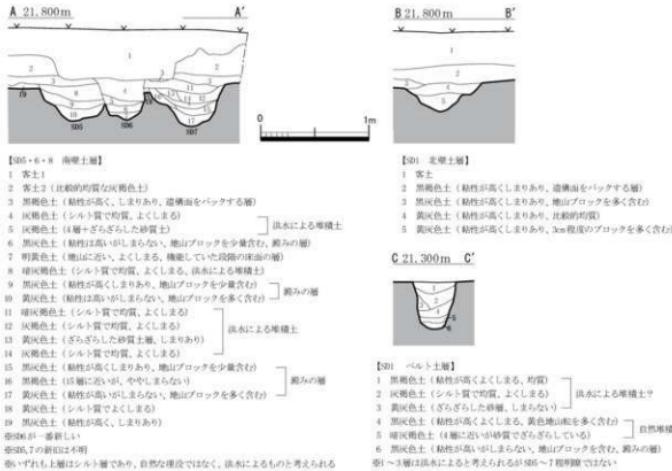
調査区東寄りに位置し、やや西に振った南北方向に流れる。上端の幅は 22 ~ 69cm、下端幅は 14 ~ 51cm、深さは最大で 9cm を測り、南北に延長する。断面形状は逆台形状をなし、単層である。出土遺物はなかった。

4号溝状遺構（第3図、図版1・2）

調査区中央部に位置し、やや西に振った南北方向に流れる。上端の幅は 20 ~ 33cm、下端幅は 10 ~ 18cm、深さは最大で 23cm、長さ 3.0 m を確認している。断面形状は逆台形状をなし、単層である。埋土から土器片 1 点が出土しているが、小片のため器種・器形ともに不明である。

5号溝状遺構（第3・4図、図版1・2）

調査区西端に位置し、やや西に振った南北方向に流れる。6号溝状遺構に切られ、8号溝状遺構を切る。上端の幅は 48 ~ 60cm、下端幅は 16 ~ 45cm、深さは最大で 23cm を測り、南北に延長する。断面形状は、逆台形状をなす。土層の堆積状況は水平堆積を示しており、9層・10層では粘質性の



第4図 溝状造構 土層断面図 (S=1/40)

高い土に地山の土質の混入していることから、溝が機能していた時点の澁みの層と想定できる。出土遺物はなかった。

6号溝状造構 (第3・4図、図版1・2)

調査区西端に位置し、やや西に振った南北方向に流れる。5号溝状造構を切る。上端の幅は38cm、下端幅は27~35cm、深さは最大で32cmを測り、南北に延長する。断面形状は逆台形状をなし、土層の堆積状況は水平堆積を示している。4・5層が砂質土であることから2号溝と同様に洪水による堆積と考えられる。また、6層が地山ブロックを含み粘質性が高いことから澁みの層、7層が地山に近い土質であることから溝の機能していた時点の床面の層と想定される。出土遺物はなかった。

7号溝状造構 (第3・4図、図版1・2)

調査区西端に位置し、南北方向に流れる。上端の幅は58cm、下端幅は31cm、深さは最大で24cmを測り、南北に延長する。断面形状は逆台形状をなすが、部分的に東側にテラス部をもつ個所もある。土層はレンズ状の堆積を示している。11~14層はシルト質で砂質土を呈していることから、2号溝状造構・6号溝状造構と同様に洪水による堆積と考えられる。また、15~17層は地山ブロックを含む粘質性の高い土壌であることから、澁みの層と想定できる。出土遺物はなかった。

8号溝状造構 (第3・4図、図版1・2)

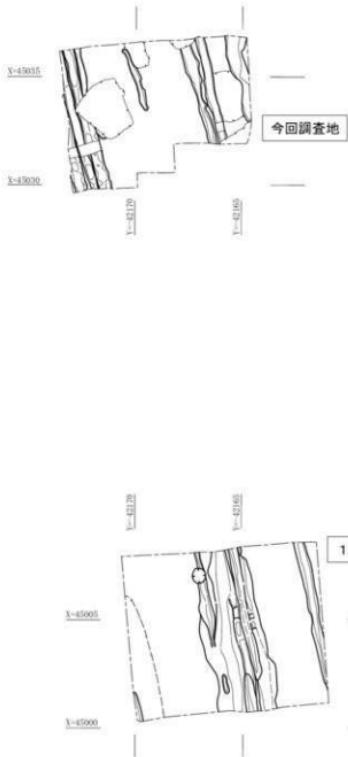
調査区西端に位置し、南北方向に流れる。5号溝状造構に切られる。南側は擾乱に削平されており、延長は不明である。上端の幅は24~30cm、下端幅は14~25cm、深さは最大で24cmを測り、北へ延長する。断面形状は逆台形状をなし、単層である。出土遺物はなかった。



【小結】

今回検出した遺構は、北方向から南方向に流れる水路（溝状遺構）8条で、いずれも幅30～70cm程度と小型である。うち2号溝状遺構は、深さ約40cmを測り、床面にも整った面を持つ。また、5～8号溝状遺構の上層はいずれもシルト層であり、自然な埋没ではなく、洪水によるものと考えられる。出土遺物は、2号溝状遺構と4号溝状遺構で土器の小片を発見しているが、どちらも小片のため時代特定はできなかった。

周辺の発掘調査事例としては、今回調査区の約20m南側に1次調査地がある。1次調査地で検出された3号水路は、今回の5～8号溝状遺構と同一のものと考えられる。本遺跡の北側には江戸時代後期に開削された用水路があることから、これらの遺構はその用水路から台地上に引かれた水路群の一部である可能性が考えられる。今後の調査によって新たな知見が得られることに期待したい。



第5図 小郡大原町遺跡1・2の遺構対応関係 (S=1/200)



2. 横隈上ノ原上遺跡 4

【調査の概要】

横隈上ノ原上遺跡 4 は、脊振山系から延びる三国丘陵の縁辺部、宝満川に向かって丘陵が下る先端に位置する。丘陵の落ち際部分のためか、遺構検出面は砂層が多く、この砂層より下位では粘土質系の基盤層へと変化する。遺構検出面の標高は 17.9 ~ 18.3 m 前後であり、西側から東側へ徐々に標高が低くなる。現地表からは約 60cm の深さである。

今回の調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地の東端に位置し、これまでに計 3 回の調査が実施されている。本調査地点の北側で実施された 1 次調査では、弥生時代の住居跡 2 軒や古墳時代後期の遺構が検出された。本調査地点の北西隣で実施された 3 次調査では、弥生時代の土坑や周溝状遺構、古代の住居跡が 13 軒検出されており、大規模な集落が形成されていた可能性がある。本調査地点の西側で実施された 2 次調査では、溝やピットが確認されたが、調査区が狭小であるため詳細な時期は不明である。今回の調査対象地は建物部分のみで、東西約 10 m、南北 8.6 m の範囲で、出土遺構は溝 8 条と土坑 2 基である。遺物は古代・中世のものを中心にして少量出土している。



第 6 図 横隈上ノ原上遺跡 4 遺構配置図 (S=1/80)



【遺構と遺物】

1) 溝

1号溝（第6・7図、図版3）

調査区北側に位置し、東西方向に流れる。1・4号土坑、2・5号溝を切り、調査区外へ延長する。北・南両側にテラスを持つ。上端の幅は90～113cm、テラスの幅は北側10～18cm、南側6～20cm、下端幅は34～59cm、深さは最大で81cmを測る。断面形状は逆台形状で、土層は水平堆積を示す。遺物は少量であるが、土師器の皿、鍋の小片などが出土している。

出土遺物（第10図、図版8）

1は甕の小片、くの字口縁で、内面の後が明瞭である。2～4は土師器の皿、底部が残存するものは全て糸切りである。5は土師器の鍋の口縁部片。端部は粘土紐の貼り付け。6は湯釜の口縁部片。素口縁の外側に菱形のスタンプが押されている。7は擂鉢の底部片。内面には4条1組の擂目が施されている。8は石臼の破片である。内面には断面U字形の溝が刻まれているが、単位は不明である。また、上白から下白かも不明である。

また、2～5は上層、1は中層、6～8は下層から出土していることから、遺構の時期は14世紀後半頃から15世紀に相当すると考えられる。

2号溝（第6・7図、図版4・6）

調査区西側に位置し、南北方向に流れる。1号土坑、6・7・8号溝を切り、1号溝に切られる。南側は調査区外へ延長する。西側にテラスを持つ。上端の幅は90～103cm、テラス部分の幅は18～44cm、下端幅は37～40cm、深さは最大で29cmを測る。断面形状は逆台形状で、土層はレンズ状堆積を示す。東側の深い部分が埋没した後、西側のテラス部分を中心として溝を使用し、最後に東・西両側を溝として使用したと考えられる。遺物は少量の土師器が出土地している。

出土遺物（第10図、図版8）

9～11は土師器の皿である。9は摩滅が激しいため板压痕のみ確認できるが、10・11の底部は糸切りである。

3号溝（第6・7図、図版4・6）

調査区中央の南側に位置し、やや東へ振った南北方向に流れる。6・7・8号溝を切り、南側は調査区外へ延長する。上端の幅は36～56cm、下端幅は28～47cm、深さは最大で12cmを測る。断面形状は逆台形状で、单層の埋土には浅黄橙色や黄橙色を呈する砂地がブロック状に混ざり込んでいる。遺物は陶器の甕の胴部片が1点出土している。小片のため実測していないが、内外面タタキが施されている。

4号溝（第6・7図、図版5・6）

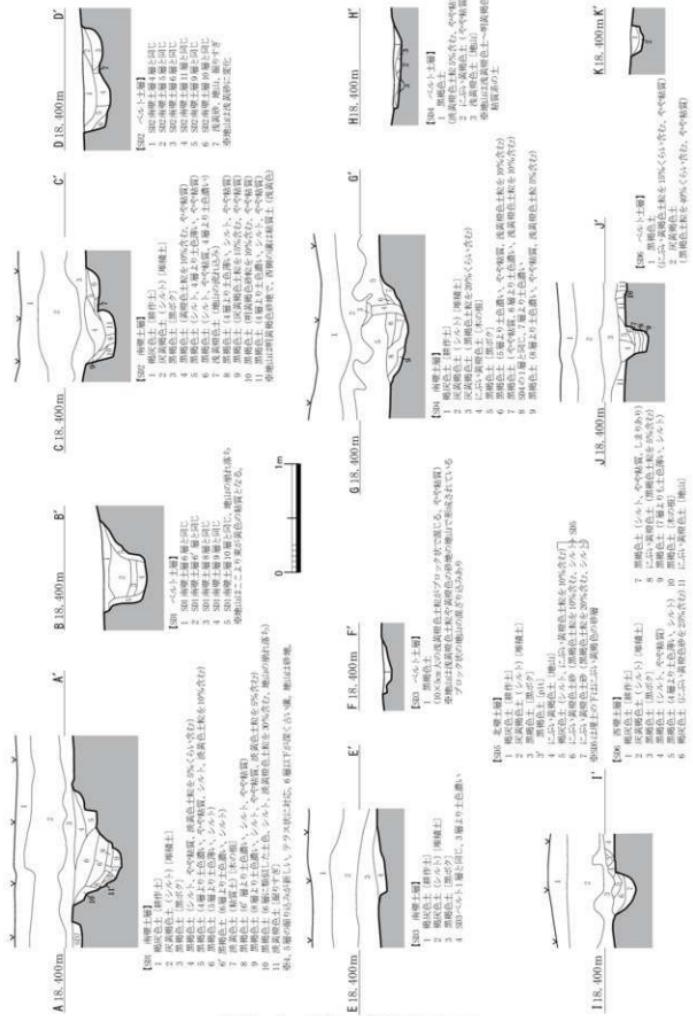
調査区中央の東寄りに位置し、やや北東一南西方向に流れる。6・7・8号溝を切り、南側は調査区外へ延長する。上端の幅は71～96cm、下端幅は46～63cm、深さは最大で22cmを測る。断面形状は逆台形状で、土層は一部单層であるが、深いところではレンズ状堆積を示している。堆積状況から、8・9層が堆積した後、一度溝さらいを行い、6・7層が堆積し埋没したと考えられる。遺物は須恵器と鉄滓が出土地している。

出土遺物（第10図、図版8）

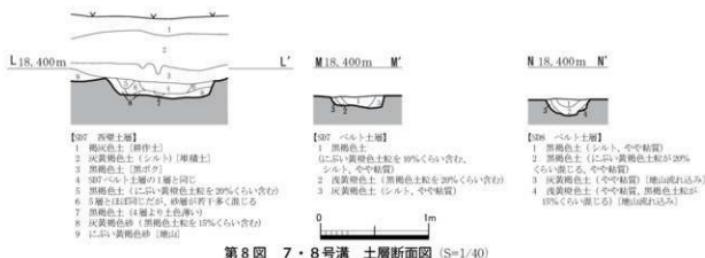
12は須恵器の坏身である。体部片の小片であり、立ち上がりがやや内傾している。

5号溝（第6・7図、図版5）

調査区北側に位置し、北西一南東方向に流れる。1号溝に切られ、北側は調査区外へ延長する。



第7図 1～6号溝 土層断面図 (S=1/40)



上端の幅は23~54cm、下端幅は7~46cm、深さは最大で17cmを測る。断面形状は逆台形状で、土層は水平堆積に近い様相を示している。遺物は弥生土器、黒曜石が出土しているが、いずれも小片である。

出土遺物（第10図）

13は弥生土器の壺の胴部片で、平底を呈する。

6号溝（第6・7図、図版6）

調査区南側に位置し、東西方向に流れる。2・3・4号溝に切られ、調査区外へ延長する。上端の幅は28~48cm、下端幅は13~24cm、深さは最大で18cmを測る。断面形状は逆台形状で、土層は水平堆積に近い様相を示している。遺物は、弥生土器が1点出土しているが、小片のため実測はしていない。

7号溝（第6・8図、図版6）

調査区中央の南寄りに位置し、北西—南東方向に湾曲して流れる。2・3・4号溝に切られ、西側は調査区外へ延長する。上端の幅は38~70cm、下端幅は22~44cm、深さは最大で23cmを測る。断面形状は逆台形状で、土層はレンズ状堆積を示す。ベルト土層の2・3層は地山と類似した土色であることから、使用・埋没時期の地山の流れ込みと考えられる。遺物は土師器、須恵器が出土しているが、いずれも小片である。

出土遺物（第10図、図版8）

14は須恵器の壺蓋のつまみ部である。扁平な形状を呈している。

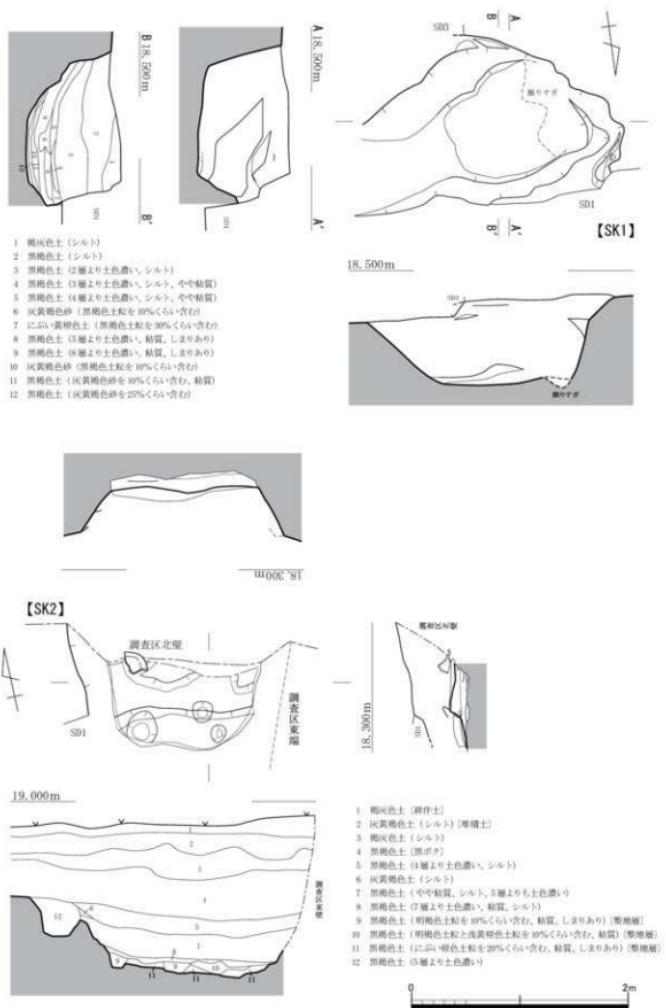
8号溝（第6・8図、図版7）

7号溝と並走するよう北西—南東方向に湾曲して流れる。1号土坑、2・3・4号溝に切られ、東側は調査区外への延長が想定される。上端の幅は22.5~40cm、下端幅は10~26cm、深さは最大で26.5cmを測る。断面形状は逆台形状で、土層はレンズ状堆積を示している。3・4層は地山と類似した土色を呈していることから、使用・埋没時期の地山の流れ込みと考えられる。遺物は、弥生土器、須恵器が出土しているが、いずれも小片である。

2) 土坑

1号土坑（第9図、図版7）

調査区西側に位置し、1・2号溝に切られる。平面プランは156×188cmの楕円形を呈し、深さは最大84cmを測る。土層はレンズ状堆積を示しており、4~12層が1号土坑の堆積土となる。8・9・11層で粘性土、10層で灰黄褐色砂層、地山直上では一部鉄分の沈着を確認している。このこ





とから、10層で一度整地した後、使用・埋没した可能性が想定される。遺物は、弥生土器、土師器、須恵器が出土しているが、いずれも小片である。

出土遺物（第10図、図版8）

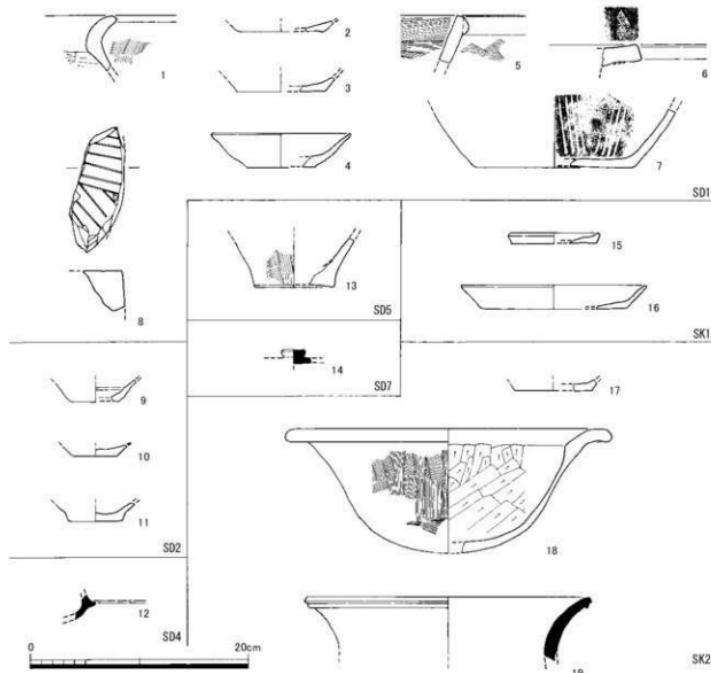
15・16は土師器の皿である。16は摩滅が激しいが、15は糸切り痕が確認できる。

2号土坑（第9図、図版7）

調査区北東隅に位置し、1号溝に切られる。遺構の大半は調査区外である。平面プランは $204 \times 80\text{cm}$ の隅丸方形を呈し、深さは最大 62cm を測る。土層は水平堆積を示しており、9層以下で整地層を確認している。整地層直上の8層では、粘性の高い黒褐色土が薄く全体に広がっていることから、使用時の堆積土と想定される。なお、整地層では所々でピット状の掘り込みを確認したが、どれも深さが 6cm 前後と浅いことから柱穴とは考え難い。遺物は土師器、須恵器が出土している。

出土遺物（第10図、図版8）

17は土師器の皿である。底部は厚く、短くつまみ出すような形状で上方に伸びる。18は土師器の鉢である。身は浅く、体部からゆるやかに外反して口縁部へ至り、口縁部内面の稜が明瞭。内面には部分的にコゲが付着している。19は須恵器の甕。肥厚した口縁端部には強いナデが1条施されており、頸部に文様はない。



第10図 出土遺物 実測図 (S=1/4)



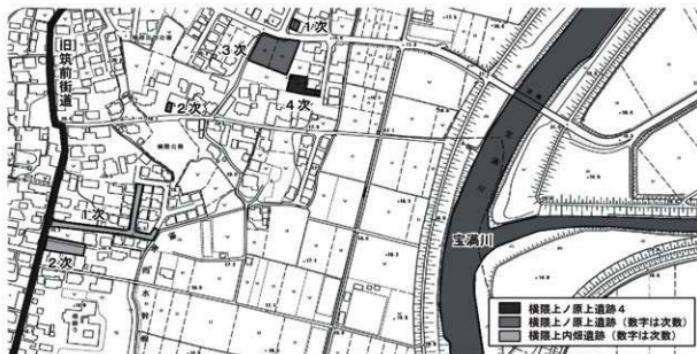
【小結】

横隈上ノ原上遺跡4で検出した主な遺構は、中世の溝3条・土坑1基、古代の溝2条・土坑1基、弥生時代の溝2条である。以下、溝と土坑に焦点を当て、周辺遺跡との関連性を検討したい。

まず、検出した溝は、大きく分けて東西方向に延びる1・5～8号溝と南北方向に延びる2～4号溝がある。周辺におけるこれまでの発掘調査では、1次調査で弥生時代後期と古墳時代後期を中心とした集落域、3次調査で弥生時代中期と古代を中心とした集落域、横隈上内畠遺跡1で近世、横隈上内畠遺跡7で中世の遺構が確認されている。こうした状況を踏まえると、今回の調査で検出した溝はいずれも、既調査地で確認された遺構の時期と合致することから、これらの集落域から宝満川に至る低地に向かって、溝が掘削されていたと考えられる。このことは、地形的な特徴とも合致する。また、今回の調査地点の東側は、西から東へ大きく傾斜する地形の変換点にあたっている。また、遺構検出面が調査区中央部から砂層に変化しており、河川氾濫原に近いと考えられる。以上2点から、本調査地は宝満川に向かって下る丘陵の先端に該当すると判断でき、丘陵の落ち際まで溝を掘削するという土地利用が想定される。また、1号溝は40cmと浅いものの、幅が90～113cmと広く、ほぼ東西方向の正方位に乗っている。2号溝も同様に幅が広く、ほぼ南北方向の正方位に乗る。これらは中世の市内で数多く発見されている、土地区画のための溝の可能性が考えられる。

次に、1号土坑は中世の所産で、1号溝より古い時期に使用されていたと考えられる。この土坑は、埋土がレンズ状堆積をなし、6・10層で砂層、8・9・11層で粘質土層が形成されていること、最下層12層において鉄分の沈着が確認できることから、素掘りの井戸として使用されていた可能性が考えられる。横隈上内畠遺跡7で検出された中世の素掘り井戸と比較した場合、1号土坑は深さが最大84cmとやや浅いが、平面プランが楕円形で、埋土の堆積層も鉄分を含む粘質土による水平堆積もしくはレンズ状堆積をなすなど類似点が多い。

一方、2号土坑は古代の所産であり、最下層部である9・10・11層において地山と色調が同じ整地層を検出している。古代の整地層を伴う土坑は、上岩田遺跡で多数発見されている。また、この土坑で整地を行った理由として、低地に構築するため水はけを考慮した可能性が考えられる。横隈上ノ原上遺跡3では、6世紀末～7世紀前半を中心とした集落域が確認されており、8世紀前半の土器が多く出土している遺構もある。したがって、集落域の最盛期は6世紀末～7世紀前半であるが、8世紀前半頃までの活動は継続していたと考えられる。



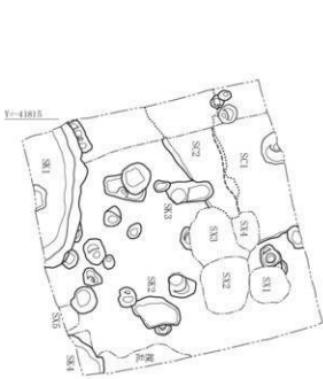
第11図 調査地周辺の遺跡 (S=1/50,000)

Y-41829

Y-41815

Y-41810

Y-41805



第12図 小郡上町遺跡 遺構配置図 (S=1/80)



3. 小郡上町遺跡

【調査の概要】

小郡上町遺跡は市域中央の平野部に形成された洪積台地上に位置する。周辺には、奈良時代の集落遺跡である小板井京塚遺跡や、近世の往還を検出した小郡博多道遺跡が所在している。但し本遺跡の所在箇所は、旧来北東から南西に延びる谷地形と推定され、遺跡の分布する可能性は極めて低いと判断されていた。

調査対象地は国登録記念物「平田氏庭園」（平成30年2月13日告示）及び市指定有形文化財（建造物）「平田家住宅」（平成28年8月16日指定）所在地に該当する。庭園は平成28年度に小郡市教育委員会が、建物は平成26・27年度に鹿児島大学名誉教授である土田充義氏を中心とした「豪商平田家住宅建築調査研究会」が調査を実施している。また、平成29年度には「平田家住宅」の一部建物の改修工事を小郡市教育委員会が行った。改修工事の一環として東門を曳移転したが、これに伴う基礎工事の際に、当時の地表面より40cm下で古代～中世の遺構を確認した。これを契機に、新たに周知の埋蔵文化財包蔵地「小郡上町遺跡」として認定手続きを行い、今回の調査にいたる。調査対象範囲は建物新築部分であったが、中央を横断する既設配管を維持するため、南北に二分割して調査を行った。

【遺構と遺物】

1) 竪穴住居

1号住居（第13図、図版10）

南区の北西隅に位置し、遺構の半分は調査区外となる。N-20°-Wで平面プランは4柱の方形を呈すると考えられる。表土掘削時に上部を一部削平してしまったため、南辺は貼床の残存範囲を示している。南北検出長1.1m、東西検出幅2.3m、土層断面では深さ最大0.35mを測る。3号土坑に先行し、2号住居に後出する。貼床は厚さ10cm前後で、柱穴と想定される径0.6m、深さ0.5mの円形ピットを確認している。方位はやや異なるが、出土遺物の時期に大きく差がないことから、2号住居の建替と推測される。土師器の把手や須恵器壺の胴部片など、古墳時代後期の遺物が少量出土しているが、いずれも小片のため図示は控えた。

2号住居（第13図）

南区の北西隅に位置し、1号住居に先行する。遺構の北半部は調査区外となる。N-35°-Wで平面プランは方形を呈し、4柱の構造と考えられる。南北検出長1.3m、深さ最大0.28mを測る。東西幅は1号住居及び不明遺構群に削平されており、判然としない。また貼床は、南半部で厚さ10cm前後を確認している。南西隅の柱穴と考えられる径0.3m、深さ0.2mの円形ピットを検出した。

出土遺物（第16図）

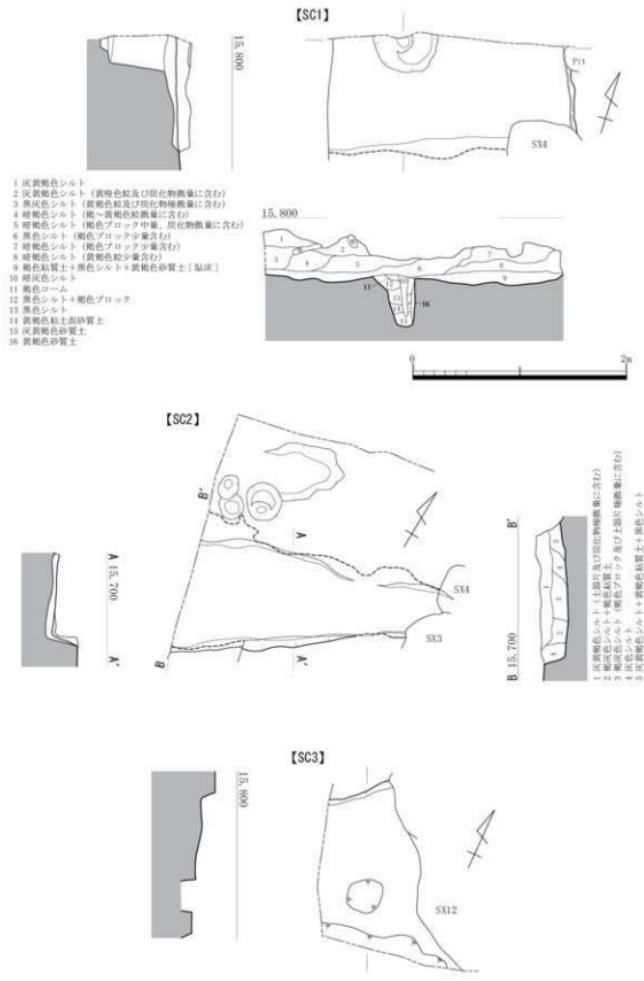
土師器・須恵器の小片がごく少量出土している。1は土師器の小型壺、口縁端部が肥厚して外反するもの。2は須恵器の坏身、かえり部分は非常に薄く仕上げており、やや焼けひずみがある。

3号住居（第13図、図版10）

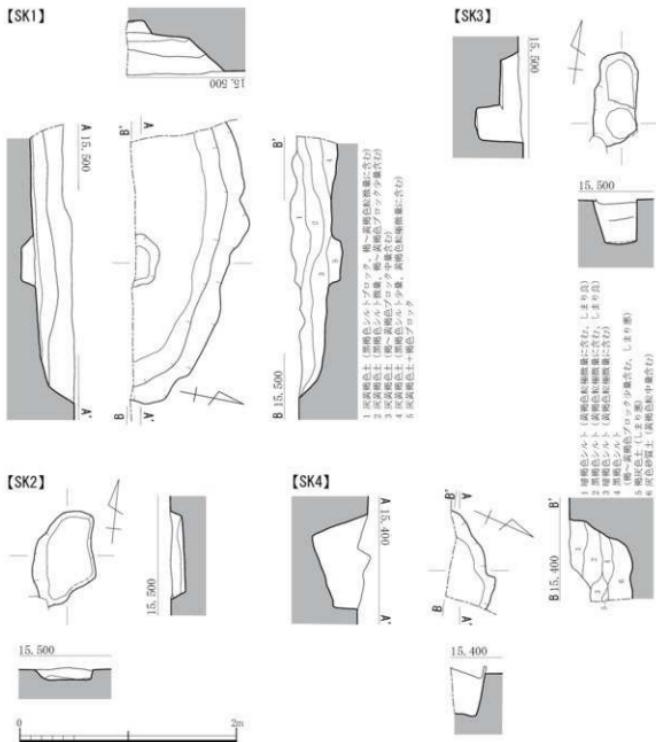
北区の南東隅に位置し、遺構の大半は調査区外となる。検出及び残存状況は非常に悪いが、N-40°-Wで平面プランは方形、4柱の構造と考えられる。南北検出長1.85m、東西検出幅10m、深さ最大0.15mを測る。東半部は不明遺構によって大幅に削平されている。全体に貼床を施していたが、下層遺構の確認は行っていない。1・2号住居と同時期の住居と考えられる。

出土遺物（第16図）

土師器・須恵器の小片がごく少量出土している。3は土師器壺の口縁部、全体に摩滅が激しい。



第13図 積穴住居 平・断面図 (S=1/40)



第14図 土坑 平・断面図 (S=1/40)

2) 土坑

1号土坑 (第14図、図版10)

南区の南西隅に位置し、遺構の半分以上が調査区外となる。東西検出長2.4m、南北検出幅1.0m、深さ最大0.35mを測る。W-15° Sで平面プランは不整規円形と思われる。壁面は二段階に屈曲する擂鉢状を呈し、中央に幅50cm、深さ10cmの不整形ピットを持つ。埋土は均質な水平堆積で、人為的に埋められたと考えられる。

出土遺物 (第16図、図版11)

近世の陶器が出土している。4は陶器の皿、見込みに蛇の目釉ハギ。5は磁器の碗で、外面に蛸唐草、内面に重ね菱と植物文を呉須で施す。6は陶器の擂鉢、口縁端部は外へ折り返すタイプのもの。7は白磁の紅皿、施釉は外面中位まで一部無釉。



2号土坑（第14図、図版10）

南区の中央東寄りに位置する。主軸は南北方向で、平面プランは不整形を呈する。南北長0.9m、東西幅0.6m、深さ0.13mを測る。壁面は緩く傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。遺物の出土は認められない。

3号土坑（第14図）

南区の中央西寄りに位置し、2号住居に後出する。主軸は南北方向で、平面プランは長楕円形を呈する。南北長0.85m、東西幅0.4m、深さ最大0.4mを測る。北半部に長さ0.4m、幅25cmのテラス状の構造を持つ。掘立柱建物を構成する柱穴の可能性もあるが、一連の遺構と認められるピットが確認できなかったため、ここでは土坑として扱う。

出土遺物（第16図、図版11）

古代の土師器・須恵器が少量出土している。8は須恵器の皿、焼成がやや甘く、底部外面に回転ヘラ削りを施す。9は貼付高台を持つ坏身、高台は外側へ踏ん張る形状のもの。

4号土坑（第14図、図版10）

南区の南東隅に位置し、遺構の大半は調査区外となる。東西検出長0.8m、南北検出幅0.4m、深さ最大0.5mを測る。平面プランは不整形円形を呈すると思われる。壁面は強い傾斜で立ち上がり、底面は東側から西側へ向かって部分的に下る形状となっている。埋土は均質な水平堆積で、上部は非常にしまりが良い。

出土遺物（第16図、図版11）

近世の陶磁器が出土している。10は陶器の擂鉢、口縁端部は外側へ丸く折り返すタイプのもの。施釉は口縁部の一部のみで、内面には7条1組の描目を施す。

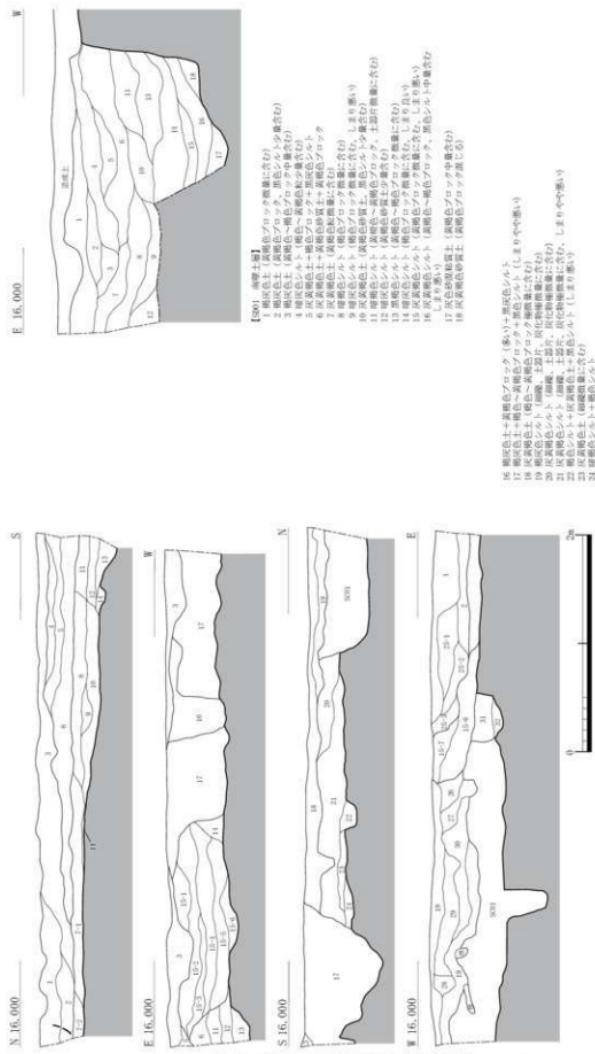
3)溝状遺構

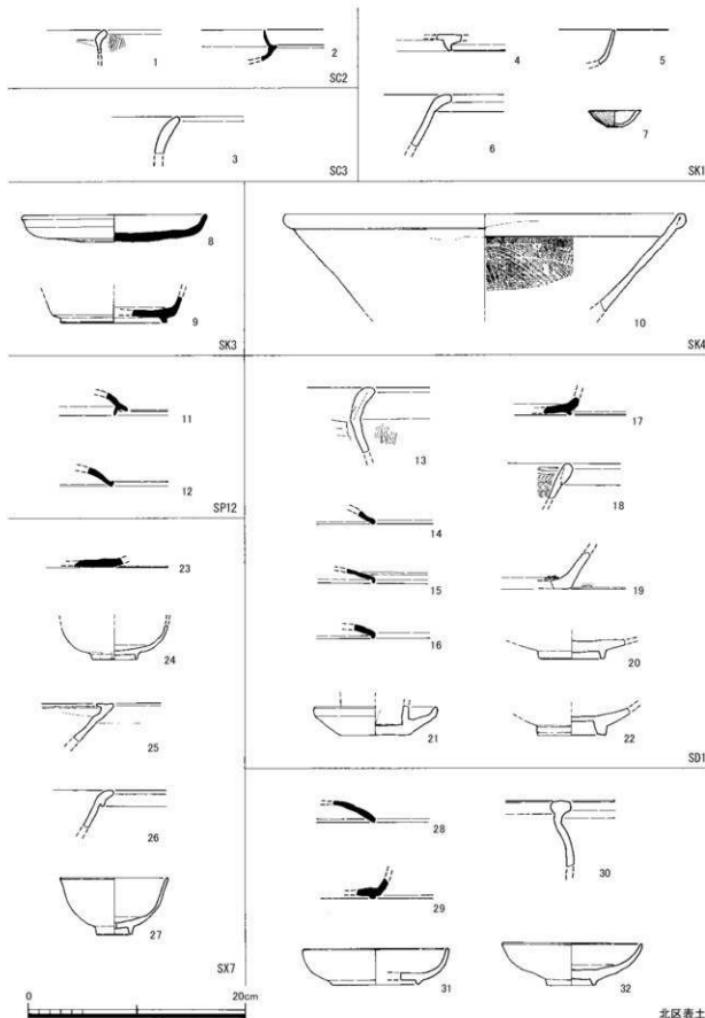
1号溝状遺構（第15図、図版10）

北区の中央東寄りに位置し、やや西へ振った南北方向に流れる。不明遺構に一部削平されているが、確認した幅は1.45m、深さ最大1.4mを測る。断面は長方形に近い逆台形で、壁面は非常に強い傾斜で立ち上がる。本来であれば完掘するべきところであったが、サブトレーンによる土層確認で非常に深い溝状遺構であると判明したため、調査時の安全確保を図るべく部分的な掘削に留めた。土層断面より、新しい時期の埋没を示す4～9層、古い時期の埋没を示す10～14層、使用時の堆積である15～18層に三分割できる。なお1～3層は、出土遺物や南区の調査区壁面土層断面の状況から、近世の整地層と判断している。

出土遺物（第16図、図版11）

遺物は古代の土師器・須恵器と近世の陶磁器に二分される。古代の遺物は埋土上層とサブトレーンの中・下層の双方から出土しており、近世の整地等の際に別の古代遺構の埋土が使用された可能性がある。近世陶磁器は主に上層から出土している。13は土師器壺の口縁部、口縁端部を内側に折り返し、緩いくの字形に屈曲するもの。14～16は須恵器の坏蓋、端部を内側へ折り返す時期のものだが形状にやや差が見られる。15には坏身との重ね焼き痕跡が認められる。17はごく短い貼付高台を持つ須恵器の坏身。18は土師器鍋の口縁部、外面は黒変し煤の付着が見られる。19は瓦器の擂鉢だが、焼成が非常に悪い。内面に5条1組の描目が認められる。20・22は陶器の皿。20は見込みに胎土目の痕跡があり、豊付けに釉ハギを施す。22は見込みに蛇の目釉ハギが残り、施釉は緑灰色と褐色の二色使いである。21は陶器の灯明皿、芯入れ部分の立ち上がりが比較的高いものか。釉薬は刷毛塗だが厚みにムラがあり雑である。





北区表土

第16図 出土遺物 実測図 (S=1/4)



4) その他の遺構と遺物

大甕設置跡（第12図、図版10）

南区の北東部で検出したSX1～4では、土坑内に真砂土を敷き、底径50cm前後の甕を設置した痕跡を確認している。いずれも構築方法は同じで、SX4→3→1→2の順に設置場所を移している。

本調査地は市指定有形文化財（建造物）「平田家住宅」の敷地内である。今回発掘調査を行った箇所には、所有者への聞き取り調査によると「みそ部屋」と称された南北方向に長い建物があり、漬物などを入れた甕が浅く地中に埋められていたとのことである（豪商平田家住宅建築調査研究会2016『平田家住宅調査報告書』）。遺構検出面の表層では、SX2・3の境目から東側にかけて整地痕跡と思われる非常に良くしまった土が面的に確認された。調査区北壁面の15・25層、南壁面の15層がこれに該当し、建物基礎の地業もしくは土間の痕跡と推測される。

7号不明遺構（第12図）

1号溝状の東側を切る掘り込みで、東辺は既設配管によって削平されている。用途及び詳細な形状は不明であるが、古代の遺物の混入と近世陶器のまとまった出土が見られる。前述の住宅調査報告書では、別棟の便所や青門が設置されていた箇所に該当する。

出土遺物（第16図、図版11）

23は須恵器の坏身、底部は回転ヘラ削りを施す。24は陶器の碗、薄手の作りで見込みに山水文を描いている。25・26は陶器の鉢類、口縁端部の形状に時期差が認められる。27は染付の碗、見込みと疊付けに離れ砂の痕跡が残る。

12号不明遺構（第12図）

3号住居を切る掘り込みで、南西部にやや乱れがあるが東辺のラインは南北方向が意識されている。この内部で標高15.1～2mに底面を接する自然石群を検出している。石は掘り込みの東辺に沿うものと南寄りで東西方向に並ぶものがあり、いずれも裏込土等は確認できなかった。この箇所は、前述の住宅調査報告書では空閑地となっている。本調査地は国登録記念物「平田氏庭園」の敷地にも該当するが、今回発掘調査を行った「裏庭」（市文化財報告書308集『平田氏庭園』）のうち、現存しない箇所については不明な点が多い。この自然石群も庭園の構成要素の一部か、敷地内の改修工事等の際に廃棄されたものの可能性がある。なお同じ掘り込みや北区表土からは、近世磁器が少量出土している。

出土遺物（第16図、図版11）

28は須恵器の坏蓋、口縁部内側にわずかな段差を持つもの。29は短い貼付高台を持つ坏身。30は肥厚した丸い口縁部の陶器甕、破断面に釉ダレが認められる。31・32は染付の皿。21は呉須の発色が良い優品。22は見込みに蛇の目釉ハギ、疊付けに離れ砂の痕跡。

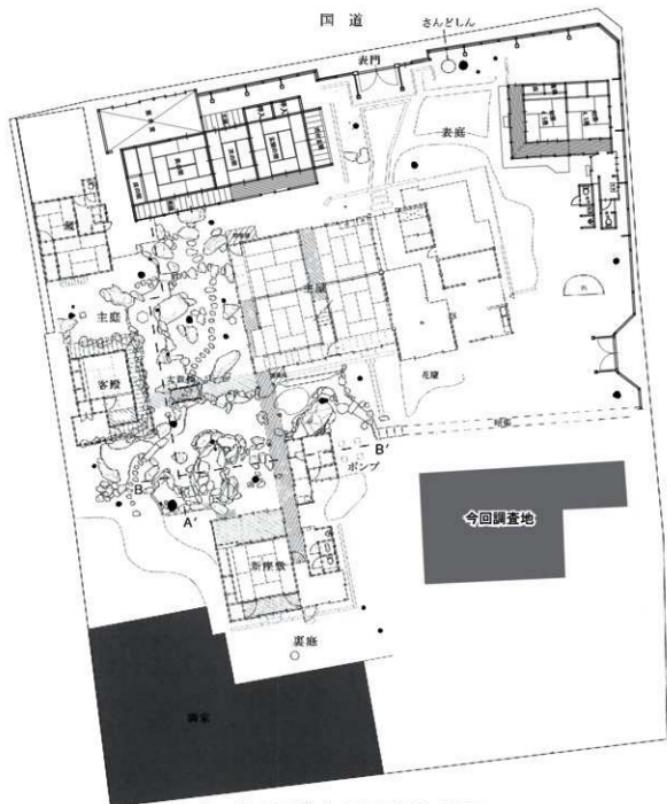
【小結】

今回の調査で確認した遺構は、古墳時代～古代の堅穴住居、土坑及び溝状遺構と、近世の土坑群である。新たに所在が確認された遺跡、かつ調査面積が限られていることから、集落域全体について言及することは困難なため、周辺の調査状況と共通性について述べておきたい。

3号土坑や1号溝状遺構から出土した須恵器は8世紀中頃の所産である。この時期は筑後國御原郡衙が小郡官衙遺跡から大刀洗町下高橋官衙遺跡へ移転し、それに伴って從来の官道や道路状遺構の廃絶が発生する、いわば小郡にとって重要な画期である。本調査地から東へ230mの場所に、7世紀後半から9世紀初頭の集落及び道路状遺構を検出した小板井京塚遺跡が所在しているが、小郡上町遺跡で出土した須恵器類もほぼ時期を同じくする。1号溝状遺構の存在から、同一集落とは考

えにくく、両者がどのような関係性であったのか興味深い。また近年の周辺地域の試掘調査でも、同時期の集落域と推測される遺構・遺物が確認されており、今後の調査成果の蓄積が待たれる。

近世の出土遺物は、17世紀中頃から19世紀前半までの特徴を持つものが混在しており、比較的時期に幅がある。現存する「平田家住宅」の建造物のうち、北側の座敷からは「慶應武歲」(1866)の墨書がある掴み鐵が見つかっている。主屋の棟札には「明治十二年再建」(1879)の記述が確認されており、いずれも今回出土した新しい時期の遺物群や、改修工事の際に出土した磁器類とは整合性があると言える。しかし「平田家住宅」のこれ以前の建造物については、文書や図面といった記録類は確認されていない。現在、家財や各種文書の所在、内容についての調査が進められており、幕末以前の様相の解明が期待される。



第17図 平田家住宅・平田氏庭園との関係図

横隈上ノ原上遺跡 4 遺物観察表

法量=ロ：口径、高：基高、底：底径、椎：残存高
器種=セ：セメント、セ・セメント、セ・セメント・セ、セ・セメント・セ・セメント

遺物番号	組合	出土遺構	形相	測量w・h (mm)	色調	鉢土	種類	成形・調整方法	備考	実用 参考	
第10遺1	1号遺	上・底	-	上・廣 高：5.1	外：明褐色 内：褐色	1mm以下の砂を やや多く含む	良	外・厚壁、ヨコナダ、ハケメ 内・厚壁、ヘラ削り		SD1-1	
第10遺2			-	底：(7.6) 高：1.0	外：にがい黄褐色 内：にがい黄褐色	1mm以下の砂を 多く含む	良	外・回転ナダ 内・回転ナダ 底：回転ホモ切		SD1上層-5	
第10遺3			-	底：(8.0) 高：1.3	外：褐色 内：にがい褐色	1mm以下の砂を やや多く含む	良	外・回転ナダ 内・回転ナダ 底：回転ホモ切		SD1上層-4	
第10遺4			-	口：(12.6) 底：6.2、 高：3.15	外：にがい黄褐色 内：にがい黄褐色	1mm以下の砂を やや多く含む	良	外・回転ナダ 内・回転ナダ 底：回転ホモ切		SD1上層-2	
第10遺5			-	上・廣 高：4.4	外：二芯～縦～深 褐色 内：にがい褐色	2mm以下の砂を やや多く含む	や好	外：ヨコナダ、ハケメ 内：ハケメ		SD1上層-10	
第10遺6		下層	瓦・溝蓋	高：3.8	外：暗灰褐色 内：灰褐色	褐色	良	外・ヨコナダ 内・ヨコナダ	口縁外側にスタンプ	SD1下層-4	
第10遺7			瓦・溝跡	底：(14.4) 高：5.4	外：にがい褐色 内：にがい褐色	3mm以下の砂を やや多く含む	良	外：單底 内：ナダ	内面に4条1組の縦目	SD1下層-1	
第10遺9			上・底	底：(4.2) 高：1.0	外：淡黃褐色 内：淡黃褐色	1mm以下の砂を 少し含む	良	外・回転ナダ 内・回転ナダ	底部に板压痕	SD2上層-1	
第10遺10			-	底：(4.0) 高：1.0	外：にがい黄褐色 内：にがい黄褐色	1mm以下の砂を 少し含む	良	外・回転ナダ 内・回転ナダ 底：回転ホモ切		SD2ベルト-1	
第10遺11			下層	上・底	底：(5.0) 高：1.7	外：にがい黄褐色 内：にがい黄褐色	1mm以下の砂を 多く含む	良	外・回転ナダ 内・回転ナダ 底：回転ホモ切		SD2下層-1
第10遺12	2号遺	-	頭・耳环	高：2.2	外：灰褐色 内：灰褐色	褐色	良	外・回転ナダ 内・回転ナダ	外面部下半に自然釉	SD4-1	
第10遺13		-	脚・便	底：(2.7) 高：4.8	外：褐色 内：褐色	2mm以下の砂を やや多く含む	や好	外：單底、ハケメ 内：單底		SD6-1	
第10遺14		-	頭・耳环	高：1.3	外：灰褐色 内：灰褐色	褐色	良	外：ナダ 内：ナダ		SD7-1	
第10遺15		-	上・底	口：(8.1) 底：(7.8) 高：1.0	外：にがい黄褐色 内：にがい黄褐色	1mm以下の砂を やや多く含む	良	外・回転ナダ 内・回転ナダ 底：回転ホモ切		SK1-1	
第10遺16		上層	上・底	口：(17.0) 底：(15.4) 高：2.2	外：褐色 内：淡黃褐色	1mm以下の砂を 少し含む	良	外・回転ナダ 内・回転ナダ		SK1-2	
第10遺17		最上層	上・底	底：(7.0) 高：1.0	外：にがい黄褐色 内：にがい黄褐色	1mm以下の砂を わずかに含む	良	外・ヨコナダ 内・ヨコナダ 底：回転ホモ切		SK4最上層-1	
第10遺18		2号上級	-	上・底	口：(20.0) 底：11.4	外：褐色～明褐色 内：にがい褐色	1mm以下の砂を やや多く含む	良	外：ヨコナダ、ハケメ 内：ヨコナダ、工具ナダ	内面に部分的にコグ付 有	SK4-1
第10遺19		-	頭・脚	口：(26.0) 底：5.9	外：灰白色 内：灰白色	1mm以下の砂を やや多く含む	良	外：ヨコナダ、工具ナダ 内：ヨコナダ、单底		SK4-2	
機種	組合	出土遺構	形相	計量値 (cm)				備考	実用 参考		
機種番号	組合番号	出土遺構	形相	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)				
第10遺8	8	1号遺	下層	石臼	11.5	4.3	3.7	235		SD1下層-1	

小都上町遺跡 遺物観察表

法量=ロ：口径、高：基高、底：底径、椎：残存高
器種=セ：セメント、セ・セメント、セ・セメント・セ、セ・セメント・セ・セメント

遺物番号	組合	出土遺構	形相	測量w・h (mm)	色調	鉢土	種類	成形・調整方法	備考	実用 参考	
第16遺1	2号上級	-	上・廣	底：2.2	内・外：褐色	1mm以下の砂粒を 少量化	良	外・ヨコナダ 内・体：工具ナダ 体・外：タテハケ		SC2-1	
第16遺2		-	頭・耳环	底：2.8	灰～にがい褐色	1mm以下の砂粒を 少量化	良	口：回転ナダ		SC2-2	
第16遺3		3号住居	-	上・廣	底：3.4	褐色	1mm以下	1mm以下の砂粒を 少量化	良	口：回転ナダ	SC3-1
第16遺4		1号上級	下層	陶・底	底：1.55	青：灰褐色 緑：にがい褐色	1mm以下の砂粒を 無理に食入	良	体：クロロ引き	見込みに蛇の目跡ハギ	SK1下層-2
第16遺5			上層	染・底	底：3.2	青・緑：灰褐色	1mm以下の砂粒を 無理に食入	良	口・体：クロロ引き、施袖	外面部唐草紋	SK1上層-3
第16遺6			上層	陶・縫跡	底：4.7	青：灰褐色 緑：黒褐色	1mm以下の砂粒を 無理に食入	良	口：クロロ引き、施袖	縫目単位不明	SK1上層-2
第16遺7			上層	白・紅皿	底：1.55	灰褐色	1mm以下の砂粒を 少量化	良	口・体：施袖		SK1上層-8
第16遺8			口：(16.9) 底：(14.5) 高：5.9	灰白色	小青色	1mm以下の砂粒を 少量化	良	口：回転ナダ 内：回転ナダ 底：回転～ヘラ削り		SK3海平頂-2	
第16遺9	11	3号土坑	南半部	頭・底	口：(16.9) 底：(14.5) 高：5.9	灰白色	1mm以下の砂粒を 少量化				



小郡上町遺跡 遺物観察表

法集=土：土師器、灰：器底、瓦：瓦質土器、白：白磁、陶：陶器、金：磁器

遺跡番号	遺跡名	出土遺物	器種	出土地点（第3三級）	色調	出土上	種類	成形・調整方法	備考	文書番号
第16回 9	11 3号上坡 南半部	須・环身	灰：(9, 8) 白：2.4	灰色	黒 1mm以下の砂粒を 少量含む	良 体・内：回転ナダ+不定ナダ 体・外：回転ナダ	貼付高台	SK3南半部-1		
第16回 10	4号上坡	須・環林	白：(37, 0) 灰：9.0	黒：に、白～赤褐色 灰：黄褐色	黒 1mm以下の砂粒を 少量含む	良 体：ロクロ引き、施釉	7条1組の櫻目	SK4-1		
第16回 11	12号 ピット	須・环基	灰：2.05	灰色	黒 1mm以下の砂粒を 少量含む	良 口：回転ナダ		SP12-2		
第16回 12	12号 ピット	須・环基	灰：1.7	灰白～灰色	黒 1mm以下の砂粒を 少量含む	良 口：回転ナダ		SP12-1		
第16回 13	1号 清状 清状	サブ 上・脚	灰：6.0	褐色	白や黒 1mm以下の砂粒を 少し含む	良 体・内：工具ナダ 体・外：タテハケ		SD1-1		
第16回 14	1号 清状 清状	須・环基	灰：1.15	灰白色	黒 1mm以下の砂粒を 少量含む	良 口：回転ナダ		SD1-14		
第16回 15	1号 清状 清状	須・环基	灰：1.3	灰色	黒 1mm以下の砂粒を 少量含む	良 口：回転ナダ 良：回転ケズリ	重ね焼き痕跡	SD1-15		
第16回 16	1号 清状 清状	須・环基	灰：1.3	黄褐色	黒 1mm以下の砂粒を 少量含む	良 口：回転ナダ		SD1-12		
第16回 17	1号 清状	須・环身	灰：1.4	灰白色	黒 1mm以下の砂粒を 少量含む	良 体：回転ナダ	貼付高台	SD1-17		
第16回 18	1号 清状 清状	サブ 上・脚	灰：3.2	内：明黃褐色 外：黒褐色	黒 1mm以下の砂粒を 少量含む	良 口：ヨコナダ 体・内：ヨコハケ 体・外：タテハケのちナダ	白練縞部にスミ付着	SD1-6		
第16回 19	1号 清状 清状	瓦・環林	灰：3.3	内・外：唯褐色	黒 1mm以下の砂粒 少量含む	良 体・外：タテハケ	5条1組の櫻目	SD1-5		
第16回 20	1号 清状	北東部 瓦・環林	灰：(6, 0) 白：1.7	黒・袖：灰白色	黒 1mm以下の砂粒を 少量含む	良 体：ロクロ引き、施釉	高台は袖カキ	SD1-23		
第16回 21	1号 清状 清状	南東部 瓦・明	灰：6.1 白：5.25	黒：黒褐色 白：褐色	黒 1mm以下の砂粒を 少し含む	良 体：ロクロ引き、施釉	回転系、無釉	SD1-20		
第16回 22	1号 清状	南東部 瓦・藍	灰：6.2 白：2.5	黒：灰白色 白：鵝色・緑灰色	黒 1mm以下の砂粒を 少量含む	良 体：ロクロ引き、施釉	見込みに蛇の目軸ハザ	SD1-21		
第16回 23	7号不明 遺構	-	須・环身	灰：0.85	灰～灰褐色	黒 1mm以下の砂粒を 少量含む	良 体：回転ナダ 良：回転クリッタ		SX7-3	
第16回 24	7号不明 遺構	-	脚・腕	灰：(4, 1) 白：3.1	赤：淡黄色 白：浅黄色	黒 1mm以下の砂粒を 少量含む	良 体：ロクロ引き、施釉		SX7-10	
第16回 25	7号不明 遺構	-	脚・環林	灰：3.55	赤：に、白～赤褐色 白：オリーブ黄色	黒 1mm以下の砂粒を 少し含む	良 口：ロクロ引き、施釉		SX7-4	
第16回 26	7号不明 遺構	-	脚・鉢	灰：3.4	赤：灰赤色 白：赤黑色	黒 1mm以下の砂粒を 少量含む	良 口：ロクロ引き、施釉		SX7-5	
第16回 27	7号不明 遺構	-	染・脚	白：(9, 8) 灰：(3, 0) 白：5.25	赤・袖：灰白色	黒 1mm以下の砂粒を 少量含む	良 体：ロクロ引き、施釉	高台は袖カキ、隣れ砂 痕跡	SX7-8	
第16回 28	北区 表土	須・环身	灰：1.95	灰色	黒 1mm以下の砂粒を 少量含む	良 口：回転ナダ			北区表土剥 N-1	
第16回 29	11 北区 表土	須・环身	灰：1.85	灰色	黒 1mm以下の砂粒を 少量含む	良 体：回転ナダ	貼付高台	北区表土剥 N-2		
第16回 30	北区 表土	脚・葉	灰：6.05	赤：に、白～褐色 白：暗褐色	黒 1mm以下の砂粒を 中量含む	良 口：ロクロ引き、施釉			北区表土剥 N-3	
第16回 31	11 北区 表土	染・藍	白：(13, 2) 灰：(7, 8)	赤・袖：灰白色	黒 1mm以下の砂粒を 少量含む	良 体：ロクロ引き、施釉	外縫接合部 高台は袖カキ	北区表土剥 N-12		
第16回 32	11 北区 表土	染・藍	白：12.7 灰：4.55 白：3.95	赤・袖：灰白色	黒 1mm以下の砂粒を 少量含む	良 体：ロクロ引き、施釉	見込みに蛇の目軸ハザ 高台は袖カキ、隣れ砂 痕跡	北区表土剥 N-11		



図版 1



①調査区 全景（南から）



② 1～3号溝状遺構 完成状況（南から）



図版2



① 5~8号溝状遺構 全景（北から）



② 5~8号溝状遺構 全景（南から）



③ 5~8号溝状遺構 土層断面（北から）



④ 4号溝状遺構 完掘状況（北から）



⑤ 2号溝状遺構 完掘状況（北から）



⑥ 2号溝状遺構 土層断面（北から）



図版 3



①調査区 全景（南東から）



② 1号溝ベルト 土層断面（東から）



③ 1号溝西壁 土層断面（東から）



④ 1号溝 完掘状況（東から）



図版 4



① 2号溝ベルト 土層断面（北から）



② 2号溝南壁 土層断面（北から）



③ 3号溝ベルト 土層断面（北から）



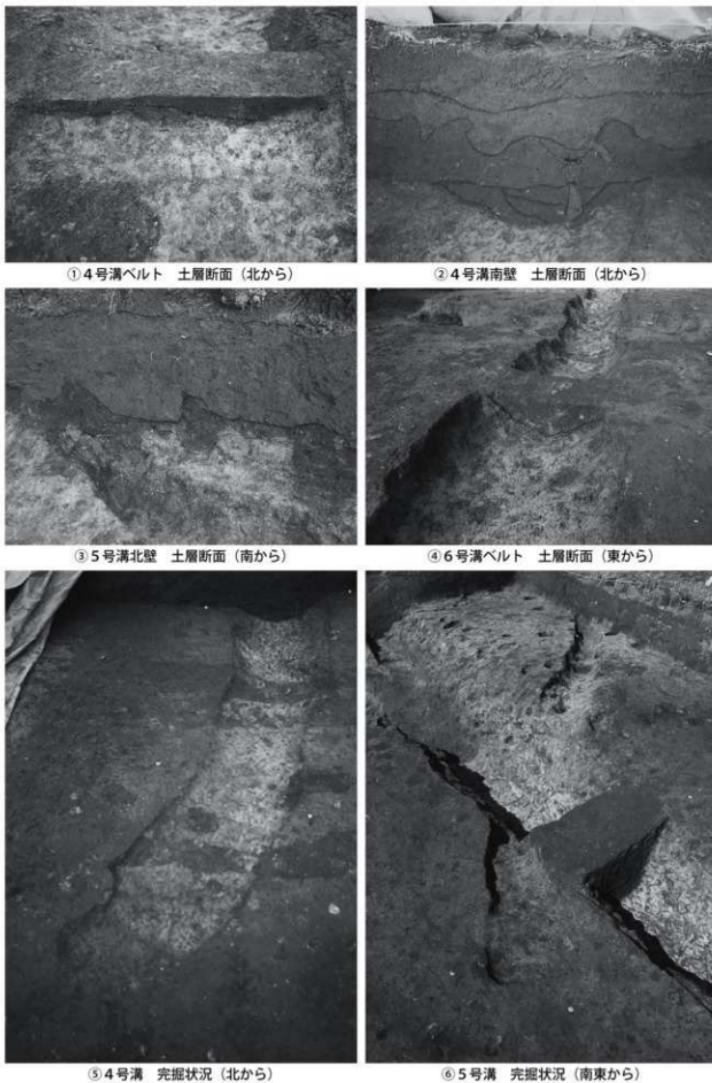
④ 3号溝南壁 土層断面（北から）



⑤ 2号溝 完掘状況（北から）

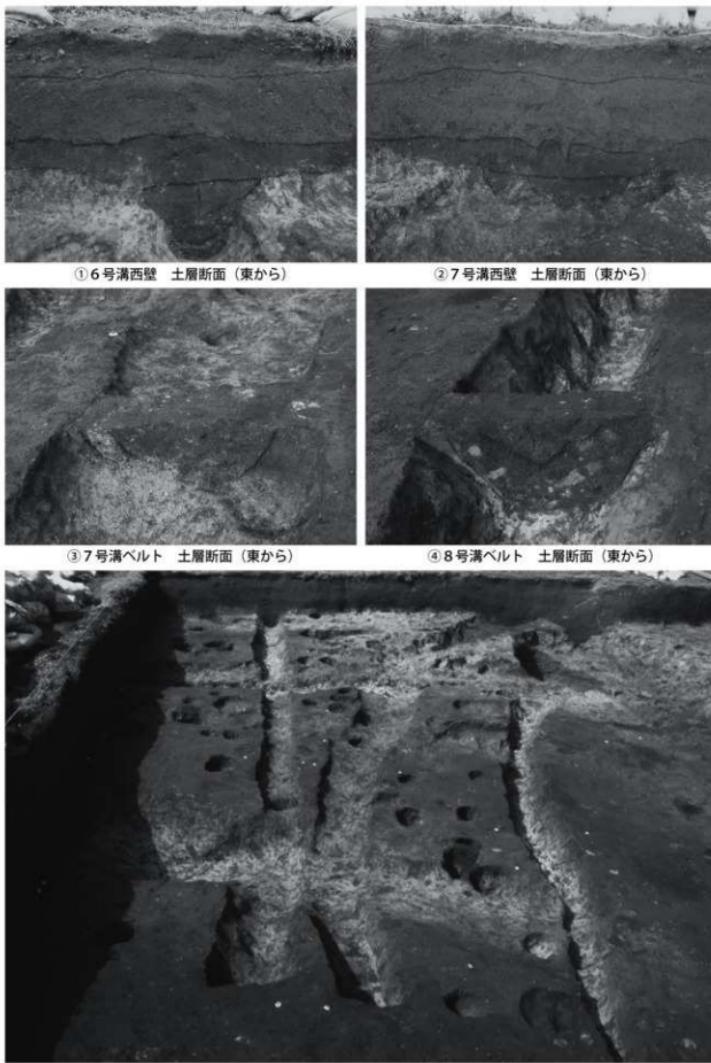


⑥ 3号溝 完掘状況（北から）





図版 6



⑤ 2・3・4・6・7・8号溝 完掘状況（東から）



① 8号溝 完掘状況（東から）



② 1号土坑 土層断面（東から）



③ 1号土坑 完掘状況（東から）



④ 2号土坑 貼床及び遺物出土状況（南から）



⑤ 2号土坑 遺物出土状況（南から）



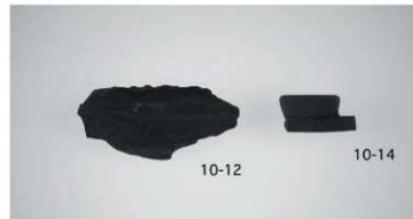
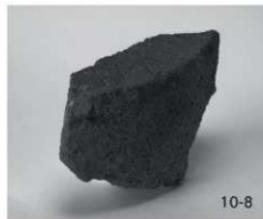
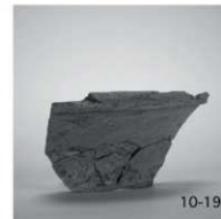
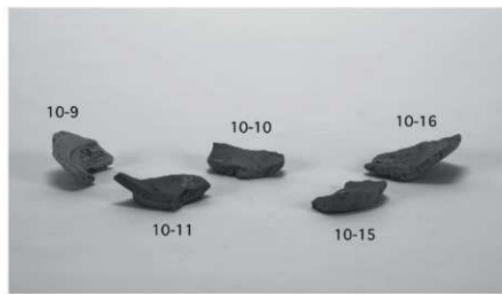
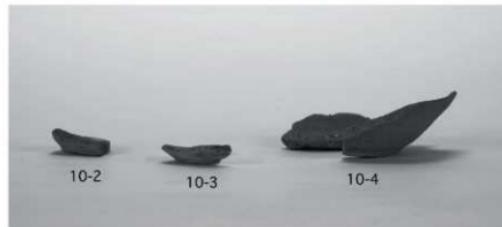
⑥ 2号土坑 土層断面（南から）



⑦ 2号土坑 完掘状況（南から）



图版 8



出土遗物





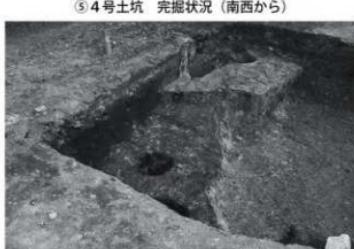
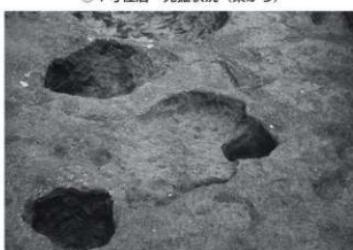
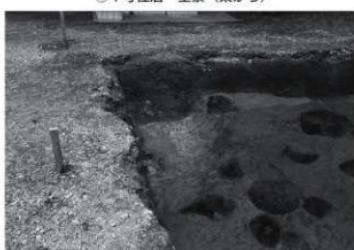
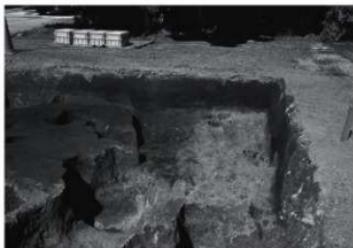
①北区 全景（西から）

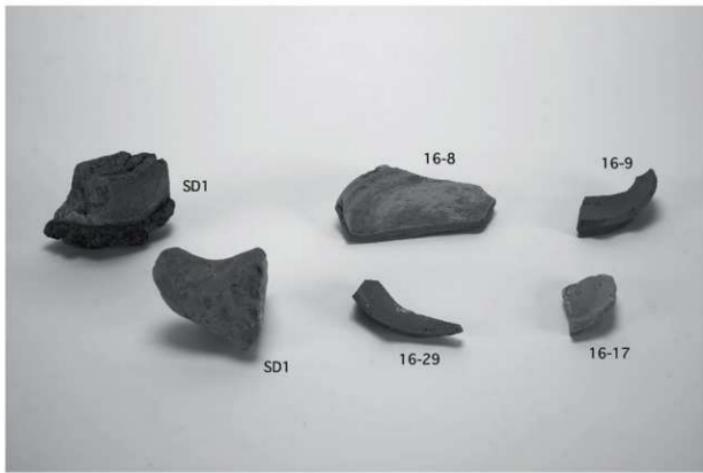
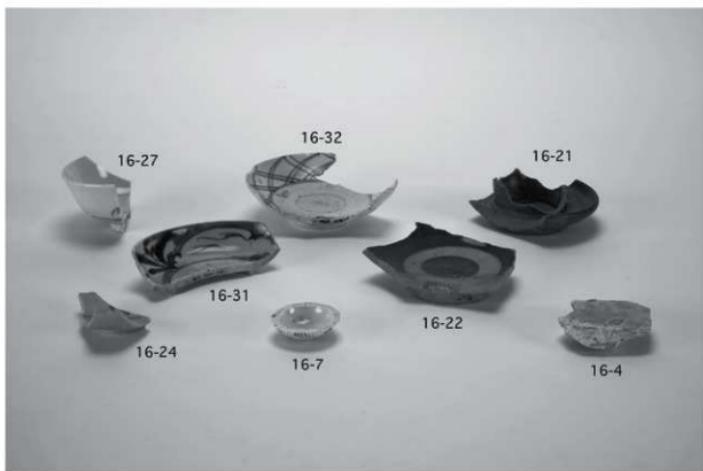


②南区 全景（東から）



図版 10





出土遺物

報告書抄録